

# 世界自然遺産の 知床にふさわしい、 美しい道路づくりから、 夢は広がります



斜里町長  
ごらい 午来  
さかえ 昌さん

## いつかは日本一の国立公園に

手つかずの自然を遺し、「最後の秘境」と謳（うた）われてきた知床が、2005年7月14日、ユネスコの第29回世界遺産委員会で世界自然遺産への登録が決定しました。これにより国内では、屋久島（鹿児島県）、白神山地（青森県・秋田県）に次ぐ、12年ぶり3件目の世界自然遺産登録になりました。整備新幹線の着工、駒大苫小牧の夏の甲子園2年連続優勝と並び、北海道にとって明るいニュースとなりましたが、ここまで尽力されてきた午来昌町長の道のりは、決して容易なものではなかったはずです。「感激のあまりうれし涙を流している顔が放映され、新聞などに載りました。やはりこれも斜里町民をはじめ一緒にやってきた羅臼町の皆さん、そしてたくさんの協力があつたからこそ、たどり着けた結果だと思えます。わたし一人が頑張ったところで何もできません。理解し応援してくださった方々の大きな力があつたおかげで、長年の夢が現実のものとなりました。知床は1964（昭和39）年に国立公園となりましたが、いつかは日本一の国立公園にしたいという気持ち

でずっと自然保護に取り組んできました。それには世界が認める世界自然遺産の登録が不可欠。自然よりも別のものを選択し保護に対して反対する意見、また誘惑もありましたが、信念を持ってそれをはね除けてきました」。

## 20世紀の垢をどれだけ洗い流せるのか

午来町長は斜里町のウトロで生まれ育ち、「わたしは故郷・知床の豊かな自然環境のもと、足で歩き、肌で感じたくさんのことを学びました。野生生物が生きる山や森の恵みが海へとつながり、それが豊漁をもたらす漁場を作ること。自然の恩恵によって人間が活かされていること。何か一つでも自然が破壊されると連鎖的に、悪影響を受けるものが別の場面にあることを。自然は偉大な先生でしたね」。

知床には以前「秘境ブーム」があり、投機目的などで離農跡地の乱開発が進められようとしていました。当時の藤谷豊斜里町長はイギリスのナショナルトラスト運動をヒントに、「知床で夢を買いませんか」と呼びかけ、1977（昭和52）年に「しれ



知床半島とオホーツク海

とこ100平方メートル運動」をスタート。それは100平方メートルを8000円とし、全国からの寄付金で土地を買い取り、森林を復元するという活動内容で、午来町長も深く係わってきました。

「国有林の伐採問題が浮上した時は、長い年月をかけて育ったミズナラなどたくさんの樹木への伐採が強行されました。けれども、たとえ走り出した国の方針でも歯止めをかけることができる、固く信じていました。高いハードルがあっても屈することなく、地道な努力を積み重ねてきたからこそ、世界自然遺産登録への道が開けていったわけです」。

「北の国から」で知られる脚本家の倉本聰氏が自然塾を発足し、富良野のゴルフ場跡に植樹を行い、環境教育の場にしたいとして注目を集めています。こうした活動の先駆者的なことを午来町長たちは実践し、かけがえのない自然を次の世代へとつなげています。

「20世紀の垢をどれだけ洗い流し、子供たちの未来につなげていけるか。今、大人たちが問われている課題です。急いで作りすぎることとは、失うことを一生懸命やることではなかったでしょうか」という言葉の重みは、はかり知れません。

## 地域住民が一緒に考える道づくりへ

海外へ赴くたびに、午来町長は故郷の風景に疑問を感じます。道路を例にとると、視界に必ず入ってくる乱立する電柱、全国統一の標識の数々、夏でも銀色にキラキラ光る雪避けのフェンスなど。

「美観という意識を疑います。道路は美しくなければ、道路ではありません。もう点から点を結べばいいという時代ではなく、線上にストーリー性があり、ほっとなごめるような演出が必要です。美しい道づくりは、美しい地域づくりであり、美しい人の心を育む重要な意味を持っていると思います。文化の振興は芸術や美術だけでなく、道路づくりも文化を形成する重要なファクターです。道路管理者は“こうしたらどうでしょう”という提案がでた時に、ただ法律を持ち出してダメ出しをするのではなく、世界自然遺産のエリアや周辺にふさわしい道づくりとは何かを私たち地域住民と一緒に考え、時には特例を作ってもかまわない

と思うんです。電柱の埋設だって決して不可能なことではありません」。

知床を訪れた人の胸に、車窓から眺める景色が良い思い出として刻まれることを心から願っています。もちろん地域の人たちが「どこにもない、景観にマッチした知床らしい道路だ」と誇りに思えば、道路の価値観はさらに高まるはずです。

こうした思いがある反面、少なからず予想はしていましたが、登録以降マイカーやレンタカーが増え道路での傍若無人ぶりは目にあまる限り。ゴミのポイ捨て、シカやキツネなど野生動物を見つければ車をとこまわらず停め、エサまで与えるという始末です。

「欧米の国立公園では公園内にレンジャーをはり付けるなどして、マナーの悪い人を指導していくような措置が取られていますが、知床ではレンジャーとして活動する環境省の職員がわずか5人。ボランティア的な人はいても、何の権限もありません。観光客が多く訪れることで経済的なメリットは町にもたらされますが、的確なルールづくりをしなければ」と、デメリットが増長されることを心配しています。

## 子供たちが胸をはれる、わが町斜里

「町の人たちは、世界自然遺産をキーワードにした生活、教育、経済などを考えるようになってきたと思います。わたしも機会があるたびに、例えば“配達は電気自動車にできませんか”というような、環境問題を身近に感じてもらえるような発言をするようにしています。子供たちが、”ぼくらの町は世界自然遺産の町で、しかも環境問題にも真剣に取り組んでいる”と胸をはり、大きな夢を描いて斜里町で育っていけば、未来は明るいものになっていくと思うんです」。

そう話す午来町長の顔が、あたたかで優しい笑顔になります。

冬は交通止めになる知床横断道路を活用して「知床の厳しい冬を知ってもらってはどうか」など、これからもアイディアにあふれた新たな取り組みをしていきたいと、チャレンジ精神を旺盛な午来町長。最後に「自然の宝庫である知床に、ぜひいらして下さい」というメッセージをいただきました。